

**2017(平成 29)年度
武蔵大学 FD 活動報告書**

刊行にあたって

武蔵大学長 山寄 哲哉

本年度のFD活動報告書の刊行にあたって、初めにこれまでの経緯を振り返っておこう。

本学のFD活動は、2000年の「授業評価アンケート」を契機に、学部における授業改善の試みとしてスタートした。その後、2010年に「武蔵大学におけるFD活動の基本的方針と課題」がまとめられ、本学のFD活動の基本枠組が以下の5項目にまとめられた。

- 1) 大学経営の中核的課題の一つとしてFD・SD活動を位置づける
- 2) 教育活動改善の取り組みをFDと定義する
- 3) 従来の取り組みの前進点を確認し、革新しつつ継承する
- 4) 学部等が主体的に関わる全学的推進体制を整備する
- 5) 学生・教員・職員の参加体制を構築する

これら5項目を念頭に、同年度から全学的な活動報告書がまとめられるとともに、FD研修会、学生参加によるFDフォーラム、大学院FD懇談会、他大学の先進的なFD活動の調査や報告会、ベストティーチャー賞など、さまざまな取り組みが行われてきた。これらの活動は、2014年度の大学基準協会の認証評価においても一定の評価を受けた。

2015年度には、FD活動のPDCAサイクルを確実に回すために、FD委員会の構成員に教務課長を加えた新しい体制を整備した。さらに、2018年度からは、副学長がFD委員長を担うことにより、より一層の活性化が期待されている。

さて、2017年度の特徴的な活動は、概ね以下の通りである。

- ① FD研修会でカリキュラム・ポリシーと実際のカリキュラムとの結びつきについて研修を行い、教務課においてカリキュラム・マトリックスの作成を行った
- ② FDフォーラムにおいて、新しくスタートした人文学部のグローバル・スタディーズコース(GSC)、社会学部のグローバル・データサイエンス(GDS)コースや、3期目となる経済学部のロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム(PDP)の学生たちから、これまで以上に積極的な改善意見を聞く機会が得られた
- ③ 武蔵大学の特色ある教育実践について、開始から10回目となる学部横断型課題解決プロジェクトや経済学部のゼミナール対抗研究発表会、人文学部の卒業論文報告会、社会学部のシャカリキフェスティバル等を行った
- ④ 授業収録システムの活用について、教職課程関連の授業で活用された
- ⑤ PDP・GSC・GDSという学部の特徴を生かしたグローバル教育の具体的な授業内容の紹介を活動報告書に掲載した

また、これらに加えて、2018年度から授業評価アンケートをWeb化する方法についても検討を重ね、来年度からWeb調査が実施される予定であり、これによってこれまで以上に緻密なIRが可能になるはずである。

本報告書が、本学の教育改善をさらに活発なものとするために有効に活用されることを期待して、巻頭言を閉じる。

2017 年度活動報告

FD 委員長 河合 康夫

本学では FD 関連の活動を定期的に検証し、より改善していくための方策の一つとして、毎年度末に武蔵大学 FD 活動報告書を作成している。本報告書は、その 2017 年度版にあたる。個々の活動の詳細については、本書のそれぞれの報告内容をご覧ください。ここではそれを含め、全体的に 2017 年度の活動内容を振り返っておきたい。

本学の FD 活動は大きく二つに分類できる。一つは授業評価アンケートを中心とする活動であり、もう一つは主に教員を対象とした研修会や、学生との意見交換の場としての FD フォーラムなどの企画である。本報告書の第 I 部では、定例的に毎年開催されているこれらの企画についての報告をまとめている。

FD 研修会は、主に教員を対象として、FD 活動の向上のために外部から講師を招いたり、あるいは学内の専門の教員に講演をお願いしたりして研修を行うという企画であり、例年一回は行うこととしている。昨年度は学内で新たにスタートした、主として英語での授業を行う PDP コースの経験について、学内の教員に講演していただいたが、今年度は、外部から講師をお招きし、カリキュラム・ポリシーと実際のカリキュラムをどのように結び付けていくのか、カリキュラム・マップはどのような意義があり、具体的にどのように作成されているのかについて学ぶ機会を持った。

FD フォーラムは、数名の学生の代表に、授業やカリキュラムで感じている問題や改善してほしい点について、提案をしてもらい、それをもとに出席者が自由に意見交換するという企画である。例年、ゼミのありかた、ゼミ選考の仕方などについて学生の意見を聞くことが多いが、今年は、各学部で外国語での講義を中心とするコースが始まっていることもあり、これらのコースの学生を中心に、いろいろな意見や改善してほしい点などを聞く機会をもった。まだコースが走り始めたばかりであり、当初は予想もつかなかったような事態が当然起こりうる（例えばこれらのコースの学生の一部にとっては通常の学生を中心的対象とした通常のカリキュラムの外国語の授業が易しすぎてしまうなど）が、色々と更なる改善のためのアイデアをいただけたように思われる。

大学院 FD 懇談会は、大学院生を対象とした同様の企画である。従来、大学院生との意見交換の場が限られていたため、大学院生からは講義やカリキュラムについての意見だけではなく、奨学金や図書館の開館時間、研究室の設備など様々な要望を大学に求める場としても機能してきたが、昨年度よりこの懇談会に先立ち、研究・教育環境に関するアンケートを実施し、それに基づいて議事を進行するようにしているため、より準備をした形で、当日の議論が深められるようになってきており、授業やカリキュラムについてもより深まった議論ができるようになっていくと感じられた。付け加えておくと、FD 委員会では、個々の大学院の授業についても、授業評価アンケートの実施による授業改善の方策を検討しており、より大学院の教育環境が改善できるようさらに努力を続けていきたいと考えている。

第 II 部は、授業評価アンケートの実施状況や、その集計結果についての考察を行っている。詳細はそちらを参照いただきたいが、本年度から新たな試みとして、授業評価アンケート結果の活用状況について、教員にアンケートを実施した。単に授業評価アンケートを実施するだけ

ではなく、それを授業改善につなげ、授業の質の保証につなげていくサイクルが出来上がっているかどうかを検証するための方策として位置づけている。またFD委員会では来年度より授業評価アンケートを紙媒体ではなく、インターネット経由で実施することを計画しており、そのための準備を進めていることを付言しておく。

第Ⅲ部は、FD活動と大きく関連する武蔵大学の特色ある教育実践について紹介している。一つは「ゼミの武蔵」の実践としての、ゼミ活動を中心とした取り組みなどである。学部横断型課題解決プロジェクトは課題解決型の授業実践の事例であり、ゼミ大会、卒業論文報告会、シヤカリキフェスティバルは、学部ごとにその特質を活かしつつ行っている学生の研究発表の機会について報告したものである。また本学では授業収録システムを利用し、授業改善に資することを目的として一部の授業の記録を教員に公開することを試みるなど、その活用を図っている。この授業収録システムを活用した取り組みについてもここに記している。もう一つは、各学部でそれぞれ始まった、グローバル化に対応する教育実践の報告である。経済学部についてはロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム、人文学部についてはグローバル・スタディーズコース、社会学部についてはグローバル・データサイエンスコースの取り組みについて紹介している。

最後に第Ⅳ部では、会議記録、外部の研修会への参加記録、関連する事業報告書などを掲載している。以上の記録を通じて本年度の本学のFDへの取り組みの状況を理解していただくことができれば幸いである。